福岡大学病院における過去５年間の慢性硬膜下血腫発生動向の後ろ向き調査と顎顔面外傷後に発症した慢性硬膜下血腫の１例

中村　真輔[1)]　喜多　涼介[1)]　吉野　　綾[1)]
石田晋太郎[1)]　眞野　亮介[1)]　橋口　志保[1)]
青柳　直子[2)]　嶋村　知記[2)]　瀬戸　美夏[1)]
近藤　誠二[1)]

[1)] 福岡大学医学部医学科歯科口腔外科学講座
[2)] 白十字病院歯科口腔外科

要旨：顎顔面外傷は，頭部をはじめとした多発外傷を合併する可能性があり，なかでも慢性硬膜下血腫（chronic subdural hematoma: CSDH）は遅発性に生じるため見落とすリスクがある．今回われわれは，直近５年間の福岡大学病院における CSDH 症例の疾患背景を検討し，顎顔面外傷との関連性を検討した．また，顎顔面外傷後に CSDH を発症した１例を経験したので併せて報告する．2015 年４月から 2020 年３月までの間に福岡大学病院脳神経外科で CSDH に対して外科的治療を行った症例を調査した．対象症例は 116 例，平均年齢は 76.1 ±13.2 歳，男性が６割を占め，受傷から発症までの期間の平均値は 5.2 ±3.8 週であった．認められた症状として歩行障害を筆頭に，頭痛が多かった．顎顔面外傷後に CSDH を発症した割合は 8.6%（10 例）であり，認められた主な症状は，歩行障害と頭痛であった．受傷から発症までの期間は 7.6 ±5.5 週であった．その 10 例中，実際に当科で下顎骨骨折加療後に CSDH を発症した１例を提示する．症例は 50 歳男性．初療での全身検索では，左側下顎骨骨折があるのみで，頭部を含め，その他部位には異常所見はないと診断された．全身麻酔下に下顎骨骨折観血的整復固定術を行った７週間後，軽度頭痛と手指の感覚異常の訴えがあった．頭部 MRI を撮影したところ，CSDH 発症を認めた．顎顔面外傷から CSDH 発症の割合は少ないが，約８週間という比較的長期間，丁寧に経過観察を行っておく方がより安全である可能性がある．特に男性後期高齢者において，頭痛はもちろん歩行障害を認めた場合は，CSDH 併発を念頭に置かなければならない．

キーワード：慢性硬膜下血腫，頭痛，下顎骨骨折，顎顔面外傷